

学位論文の要旨

論文題目（和文）中国語における時間表現に関する認知言語学的研究—日本語との比較を通して—

（英文）A Cognitive Linguistic Account of Temporal Expressions in Chinese: with Special Reference to Japanese

氏名 鄭新爽

論文の要旨

本研究の目的は、日本語と対照しながら、中国語の空間三軸（前後・左右・上下）を用いた時間表現の背後にある認知プロセスを解明することである。そして、これらの認知プロセスの考察を通して、人間はどのように時間を認識しているのかという問いに対して、概念メタファーだけではなく、他の認知作用も関わっている可能性があることを指摘した。

人間の時間認識（人間はどのように時間を認識しているのか）に関しては、空間領域から時間領域へのメタファー写像（＝時間メタファー）によって説明するのが一般的な流れである。時間メタファーで現在最も有力な考え方が Moore が提唱している三分類の時間論である。本研究においても Moore の三分類の時間論（ME メタファー、EMT メタファー、SEQUENCE メタファー）を用いて、三軸の時間表現を分析しようと試みたが、Moore の理論は空間三軸のいずれを用いる場合にもそれぞれ問題点が残る。例えば、前後軸の場合は、日本語には Moore の時間論で分析できない時間表現があるという主張をしている先行研究がある。そこで、本研究では、Moore の理論に事態把握の様式を組み合わせることで、これまで説明できなかった様々な事例が説明できると主張した（第3章）。また、本研究では、左右軸に関しては、Moore の理論を分析に取り入れていない。なぜなら、左右が関係する時間表現は一般的にはないと言われており、Moore 自身も一切議論していないからである。もちろん、第4章で扱ったように、中国語には左右の時間表現が存在するため、本研究では Moore に寄らない独自の分析を試みている。最後に、上下軸に関しては、Moore の SEQUENCE メタファーだけでは中国語の上下の時間表現のすべてを説明できないことがわかった。それに対し、第5章では、中国語の上下軸を用いた事態認識には SEQUENCE メタファーでは説明できない事例があることを示し、書字体系に動機づけられた新たな順序認識を仮定する必要があると主張した。

このように、本研究では、主に Moore の三分類説を引き合いに出しながら、空間の三軸（前後軸、左右軸、上下軸）におけるそれぞれの認識の差異を詳細に考察した。以下はそのまとめである。

第3章では、前後軸に基づく時間表現の背後にある時間認識について取り上げた。前後軸の場合、人間は時間を動的な移動現象として扱っており、その際、移動するのが時間である場合（EMT）と認知主体である場合（ME）がある。そして、空間領域から時間領域にメタファー写像する際にどちらが移動すると解釈されるのかによって語彙レベルでの用法や意味の差異が生じる。例えば、「先」には「過去」と「未来」とい

う両方を表すことができるが、その原因は何を移動体と見なすかによるのである。また、時間を認識する際には、認知主体の主体性の問題（事態外視点、事態内視点）も関わっている。日本語では事態を外から傍観者的に眺める事態外視点と事態の参与者として事態の中から事態を見る事態内視点の両方を持つものに対して、中国語の場合は事態外視点をとることが多い傾向がある。そのため、中国語の「先」には事態内視点を前提とする過去や未来を表す用法がなく、その代わりに、事態外視点をとる順序用法のみが存在すると説明されることになる。

次いで、第4章では、左右軸に基づく時間表現に関して取り上げた。これまでの先行研究では、人間は概念レベルでは左右軸を用いて時間を認識しているが（Fuhrman and Boroditsky 2007; Santiago et al. 2007; Fuhrman et al. 2011; Ouellet et al. 2009; 佐藤 2014 など）、左右軸を用いた言語表現はないとされていた（Radden 2011）。そして、その理由は、時間は非対称的（一方向的）であるのに対し、左右軸は対称的（無方向的）であるという基本的な性質の違いだとされていた。しかしながら、中国語には少なからず左右を用いた時間表現が存在する。そこで、本研究では、まず対称的な「左右」がなぜ非対称的な時間を表せるのかという問いから始まり、中国語の左右の時間表現の成立過程について議論した。もちろん、様々な言語の母語話者が左右の時間認識を持っていることはすでに実証されているが、この認識は時間表現にはほとんど現れず、先行研究ではほとんど検討されてこなかった。本研究では、対称性を持つ左右が中国語ではなぜ時間を表せるようになったのかという疑問に対しては、左から右へ書くという書字体系が対称性を持つ左右軸に影響を与え、その結果、左右に非対称性（一方向性）が生まれるようになり、これにより時間表現が可能となったと提案した。そして、概念レベルの左右の時間認識が言語レベルの時間表現にまで至るようになったのは、認知主体の身体の一部の客体化が起こったためであると結論づけた。この場合の客体化とは、認知主体の左右の手が概念化の対象としてステージの上に上がり言語化されるようになり、最終的には左右の手の隣接空間までもが概念化の対象としてステージ OS に上がり言語化されるようになっていく過程のことである。

もちろん、中国語の左右の時間表現はまだ少ない。ただし、それは左右の書字習慣が歴史的にまだ短く、中国語に慣習化してからまだ日が浅いからである。それと同時に、前後軸や上下軸を用いた他の時間表現が中国語では十分に発達しているため、それらが左右の時間表現の新規参入を拒んでいるという側面があることも忘れてはならない。実際、歴史が浅い左右の時間表現はまだ慣習化が十分に進んでいない。そのため、左右軸は“前天”“上周”などの語彙としてではなく、新奇な文のレベルの表現としてのみ用いられる。

最後に、第5章では、上下の時間表現の背後の認知プロセスを取り上げた。従来の研究では、上下の時間表現では川に喩えられ時間が上から下へ流れるとされてきた。それに対し、本研究では、川のメタファーの認識は二段階の手順で考える必要があると主張した。まずは、日常生活で直接経験する川は、上から下に流れる川ではなく、水平に移動する川である。そのような川に対し、通常、水は上から下へ向かって流れるという重力に関する知識を組み合わせることにより、水の流れてくる方向が「上」、水が流れていく方向が「下」という認識を得ることができる。このように、二段階の手順で形成された認識であるため、川のメタファーを用いて時間を認識するとしても、時間は必ずしも上下軸に沿って上から下へ流れることにはならない。

また、川または水のメタファーによって中国語の時間認識を理解しようとする試みに対して、本研究では、そもそも中国語の一部の上下の時間表現は時間認識ではなく順序認識に基づいているという主張を行った。この主張を裏付ける重要な事実として、およその値を表す“X 上下”構文において、X にこれるのは“月”や“回”などの順序を単位とする語彙のみであり、“点”（「時」）のような非順序的な時間単位は容認されないことが挙げられる。ただし、順序と時間を明確に分離できる場面は非常に少ないため、明らかに順序単位と言える上下の時間表現の事例はかなり少ない。それでも、この少数の証拠からいわゆる上下の時間表現の中には、実際には順序表現も存在すると結論づけることはできる。そして、この順序認識は中国における長い縦書きの習慣が中国語話者の認識に根付いたものと思われる。

最後に注意しておかなければならないのは、本研究で主張しているのは、中国語のいわゆる上下の時間表現の中には実は時間認識ではなく順序認識によるものが存在するということである。したがって、本研究では、上下の時間表現すべてに関して川のメタファーは当てはまらなるとまでは主張していない。当然、川のメタファーに基づく上下の時間表現はありうる。また、中国語と同様に、日本語にも縦書きの書字体系が古くから存在するにもかかわらず、日本語にはその影響が見られないのはなぜかという問題も残される。これについて今後の課題としたい。

このように、本研究では、日本語との比較を通して中国語の時間表現の背後に潜む複雑な認知メカニズムを探ってきた。そして、本研究の意義はまさにそこにある。実は、従来の認知言語学的研究では、往々にして、概念メタファーのみに偏った研究スタンスがとられてきた。しかしながら、本研究で明らかにしたように、人間の時間認識はそれほど単純ではない。時間認識とは、人間の日常生活に常につきまとう認識である。そのため、複雑な認知メカニズムが相互に関係し合うと考えるのが、正しい研究態度であるはずである。決して概念メタファーだけで説明のつくものではない。そのような立場に基づいて、本研究では、上下の川のメタファーの成立過程で示したような複合的なメタファーの認識の存在や時間認識に付随する順序認識、順序認識に付随する時間認識などの区別の必要性、認知主体の事態把握の様式の違いや認知主体の客体化など複合的な観点から、中国語話者の時間認識のあり方について考察を行った。